

付記1 「生活科」との関連

(1) 社会科と生活科

教育基本法の改正を受けて、学校教育法において新たに義務教育の目標が規定されるなど、義務教育全体を見通した学習指導の改善が求められている。その中の一つとして、社会科と生活科の関連も挙げられる。

「小学校学習指導要領解説 生活編」では、生活科改訂の要点の中の内容及び内容の取扱いの改善(幼児教育及び他教科との接続)で「生活科の各内容と第3学年以降の社会科、理科の内容を視野に入れ見直しを行った」と述べられている。

「小学校学習指導要領解説 社会編」においても、社会科改訂の趣旨の中の改善の具体的事項で「生活科の学習を踏まえ、児童の発達の段階に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史などに対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考えを養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る」と述べられている。

① 生活科の教科目標

生活科の教科目標は次のとおりである。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

この教科目標について、学習指導要領解説(生活編)では、「この教科目標を最も端的に言えば『具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養う』こととなる。その中で、『自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心をもつこと』『自分自身や自分の生活について考えさせること』『生活上必要な習慣や技能を身に付けさせること』が行われるという構成になっている。」と説明されている。

② 教科目標の趣旨

ア 具体的な活動や体験を通すこと

「具体的な活動や体験とは、例えば、見る、聞く、触れる、つくる、探す、育てる、遊ぶなどして直接働きかける学習活動であり、また、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの方法によって表現する学習活動である。」

「直接働きかけるということは、児童が一方向的に身近な人々、社会及び自然に働きかけるだけではない。同時に、それらが児童に働き返してくるという、双方向性のある活動が行われることを意味する。」(小学校学習指導要領解説 生活編より)

イ 自分と身近な人々、社会および自然との関わりに関心をもつこと

生活科の学習は、子どもが自分との関わりの中で、身近な人々、社会及び自然に働きかけ、また働き返させるという双方向性のある活動をめぐって展開される。「具体的な活動や体験」の中で、自分と対象との関わりによって得られた「気付き」は、無自覚なものから自覚された「気付き」へ、一つ一つの「気付き」から関連付けられた「気付き」へと高められていくのである。

ウ 自分自身や自分の生活について考えること

「自分自身や自分の生活について考えるということは、子どもが身近な人々、社会及び自然と直接かかわる中で、自分自身や自分の生活について新たな『気付き』をすることである。児童が、自分自身についてのイメージを深め、自分のよさや可能性に気付き、心身ともに健康でたくましい自己を形成できるようにすることは、自立への基礎を養う上で大切である。」

(小学校学習指導要領解説 生活編より)

エ 生活上必要な習慣や技能を身に付けること

「生活科は、児童が身近な人々、社会及び自然と直接関わり合う中で、それに必要な習慣や技能を身に付けることを目指している。」

「ここでの生活上必要な習慣には、健康や安全にかかわること、みんなで生活するためのきまりにかかわること、言葉遣いや身体の振る舞いにかかわることなどがある。また、生活上必要な技能には、手や体を使うこと、さまざまな道具を使うことなどがある。」(小学校学習指導要領解説 生活編より)

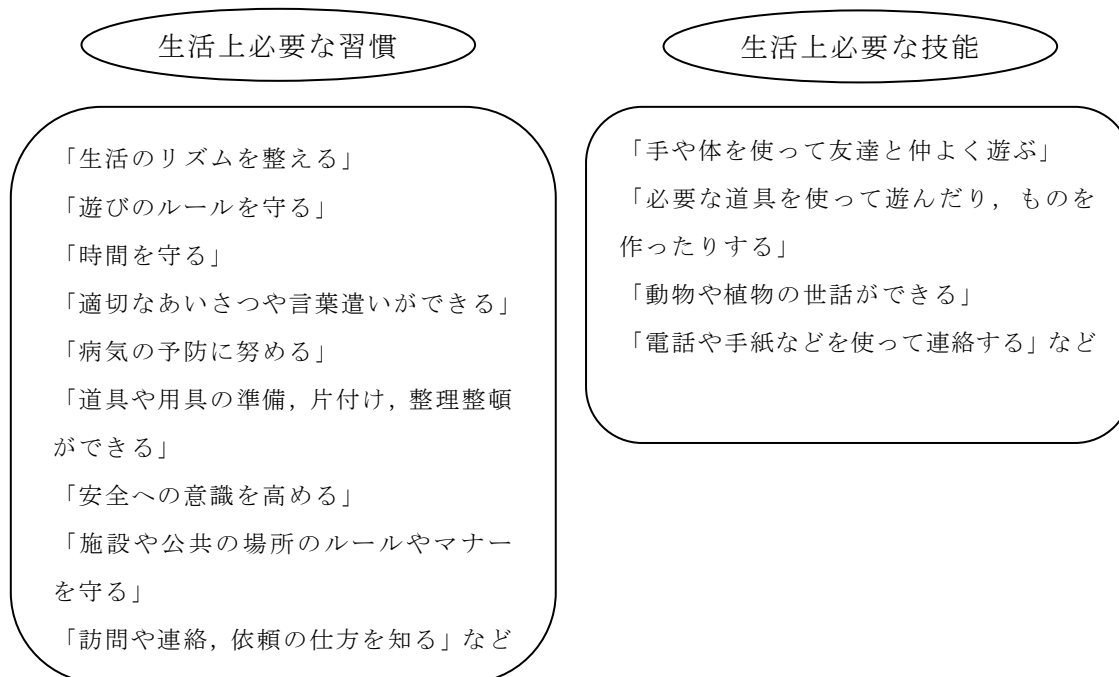


図1 生活上必要な習慣と生活上必要な技能

オ 自立への基礎を養うこと

自立への基礎を養うことは、生活科の究極的な目標である。ここでいう自立とは、三つの自立を意味している。生活科では「具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養う」ことが究極的な目標である。

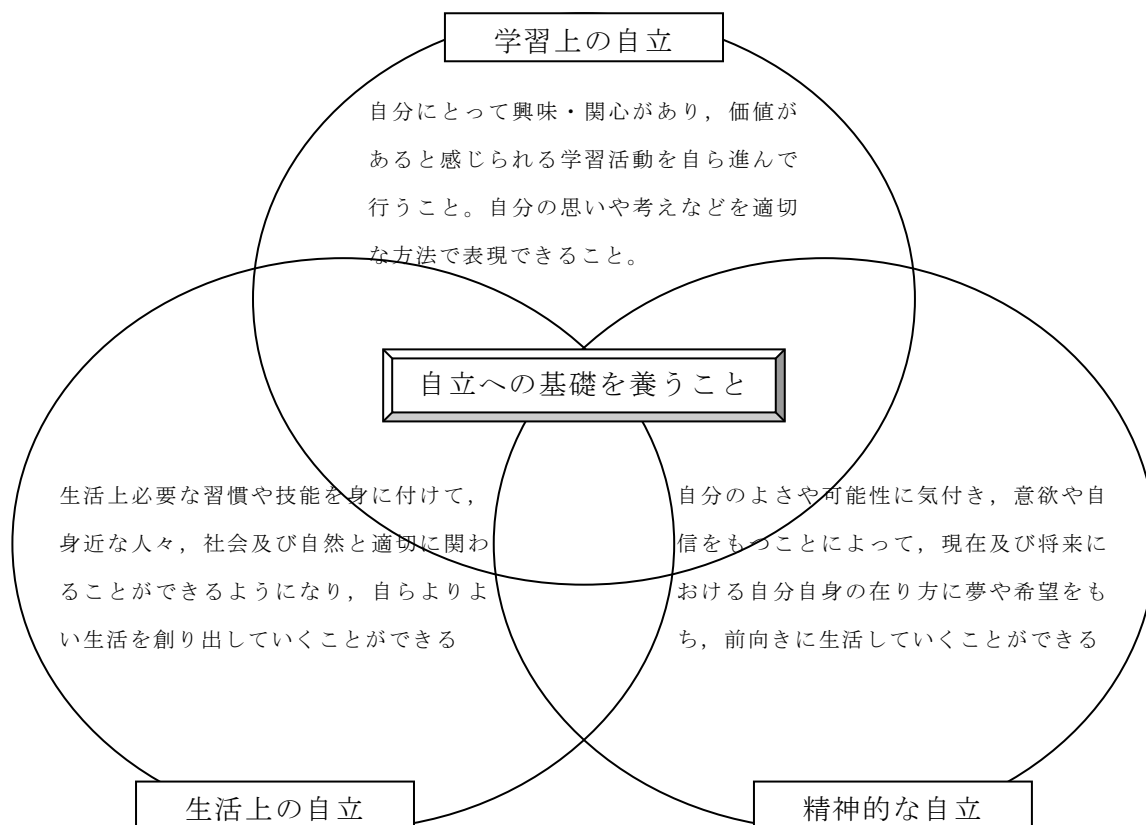


図2 自立への基礎を養うことに関する関係図

③ 生活科の内容構成の具体的な視点

生活科の学習内容を構成する際の基本的な視点は，以下の三点である。

- (1) 自分と人や社会との関わり
- (2) 自分と自然との関わり
- (3) 自分自身

この基本的な視点について，小学校学習指導要領解説（解説）では，「具体的な活動や体験を通して学ぶとともに，自分と対象との関わりを重視する生活科の内容の基本構造を原理的に説明したものであり，生活科の基本的な性格を反映したものである。」と説明している。三つの基本的な視点をさらに詳しく示したものが具体的な視点（「小学校学習指導要領解説 生活編」pp. 19-20 参照）である。具体的な視点は，次のような考え方で改訂されている。ここでは，社会科と関連するものを抜粋する。

- 地域で働く人など地域で生活する様々な人や場所などに慣れ親しみ，それらに心がひかれ，離れがたく感じる気持ちを大切にすることができるようにする必要があるので，地域への愛着について加える。
- 生産と消費については，持続可能な社会が求められる中，自らが必要な物をつくとともに，それを繰り返し使ったり活用したりすることができる必要がある。
- 情報と交流については，情報化社会が一層進展する中，多様な情報手段によって伝え合うことが求められるとともに，他者との関わりや交流などのコミュニケーションを深めることができるように必要がある。

④ 「生活科」の内容を構成する具体的な学習活動や学習対象

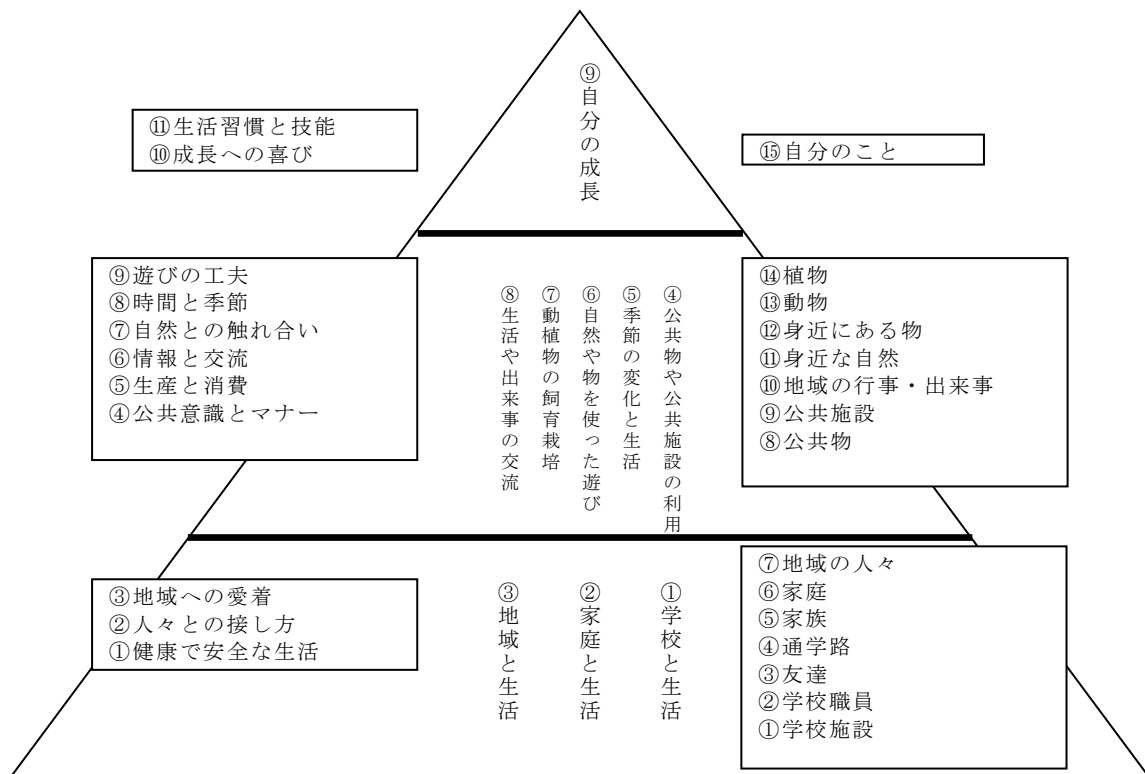
低学年児童に関わってほしい学習対象は次の通りである。

- ①学校の施設 ②学校で働く人 ③友達 ④通学路 ⑤家族 ⑥家庭 ⑦地域で生活したり働いたりしている人 ⑧公共物 ⑨公共施設 ⑩地域の行事・出来事 ⑪身近な自然 ⑫身近にある物 ⑬動物 ⑭植物 ⑮自分のこと

小学校学習指導要領解説（生活編）の中では、「生活科は、具体的な活動や体験を内容の一環としているところに特色がある。具体的な活動や体験は、単なる手段や方法ではなく、目標であり、内容でもある。つまり、生活科ではぐくみたい児童の姿を、どのような対象と関わりながら、どのような活動を行うことによって育てていくかが重要であり、そのこと自体が内容となって構成されている。」

⑤ 生活科の内容の階層性

生活科の内容には、下図のような階層性がある。



片上宗二・木村博一・永田忠道『混迷の時代！“社会科”はどこへ向かえばよいのかー激動の歴史から未来を模索するー』明治図書，2011より

図3 生活科の内容の階層性

この階層性について、小学校学習指導要領解説（生活編）では次のように説明している。

「まず、第1の階層として、内容（1）『学校と生活』、内容（2）『家庭と生活』、内容（3）『地域と生活』があり、これらは児童の生活圏としての環境に関する内容である。生活科は、児童の身の回りの環境や地域を学習の対象とし、フィールドとしてい

る。児童にとって最も身近な学校、家庭、地域を扱う内容が第1の階層といえる。

次に、第2の階層として、内容(4)『公共物や公共施設の利用』、内容(5)『季節の変化と生活』、内容(6)『自然を使った遊び』、内容(7)『動植物の飼育・栽培』、内容(8)『生活の出来事の交流』が位置付けられる。これらは、自らの生活を豊かにしていくために低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容である。低学年の時期に体験させておきたい活動とは、低学年の児童の身の回りにあるだけでなく、低学年の児童が関心を向けやすい活動であり、活動を通して次第に児童一人一人の認識を広げ、期待する資質や能力及び態度を育成していくために必要となる活動である。

そして、第3の階層に、自分自身の生活や成長に関する内容(9)「自分の成長」を位置付け、内容(1)～(8)のすべての内容と関連が生まれる階層としてとらえていく。」

⑥ 生活科の改善

このたびの学習指導要領の改訂では、生活科において、第3学年以降の社会科、理科との接続・発展も視野に入れて、生活科の各内容の見直しが行われている。具体的には次の二つの内容である。

ア 内容(3) 「地域と生活」

自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみ愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活ができるようにする。

ここでは、「地域で働いている人」を対象とすることが明示され、「地域には様々な仕事があり、それらの仕事に携わっている人たちがいることに気付くようにする」学習の一層の充実が図られている。

イ 内容(4) 「公共物や公共施設の利用」

公共物や公共施設を利用し、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。

ここでは、「公共物や公共施設を利用すること」が明示され、公共物や公共施設を実際に利用する体験を通して、「身の回りにはみんなで使うものがあることや、それを支えている人々がいることなどが分かるようにする」学習の一層の充実が図られている。

(2) 社会科と生活科の関連

生活科では、身近な地域や対象に繰り返し関わり、地域社会や地域の人々と自分とのを深める学習活動が行われる。地域での具体的な活動や体験を通じた気付きが、社会科の問題解決的な学習の基礎となる。

社会科と生活科の関連について、「小学校新学習指導要領の展開 生活科編」では、次のように述べられている。

「例えば、地域の公園を探検する活動を生活科の学習で行った場合、観察や調査・見学などの体験とそれに基づく表現活動によって、自分の伝えたいこと・聞きたいことなどを

適切に話す力や活動を通して気付いたり感じたりしたことをシートに詳しく書いたり，メモを用いて情報を整理したりする力が身に付く。対象にじっくりとかかわる時間を保障し，活動に没頭することによって，『もっと知りたい』『調べてみたい』といった探求的な営みが，科学的な見方・考え方の素地を育てていくのである。」

「人・社会・自然を一体的にとらえる低学年では，生活科を中核として他教科などとの関連を図り，横断的・合科的な指導が行われる。そこでの学びが，社会科へと発展する。」

「生活科での『見る』『聞く』『調べる』『つくる』『探す』『育てる』『遊ぶ』などの直接体験を中心とした多様な学習活動を通して，児童の学習意欲や探究心が向上する。また，多様な人との関わりを通し，児童は，自分の見方・考え方を広げ，社会の仕組みに気付いていけるようになる。」

「生活科の学習で，自然への関心を高めたり，動植物を大切に育てたり，友達や地域の人と積極的にかかわろうとしたり，見通しをもって行動したり考えたりする力を児童は獲得する。自然や社会の事象を多面的にとらえ，関係付ける学びを繰り返すことにより，社会科に直接結び付く力が育つと言える。身近なことから問題を見付けたり，願いや思いを大切にしたりしながら問題解決を進める力は，社会科を学ぶ上で欠くことのできない力である。」

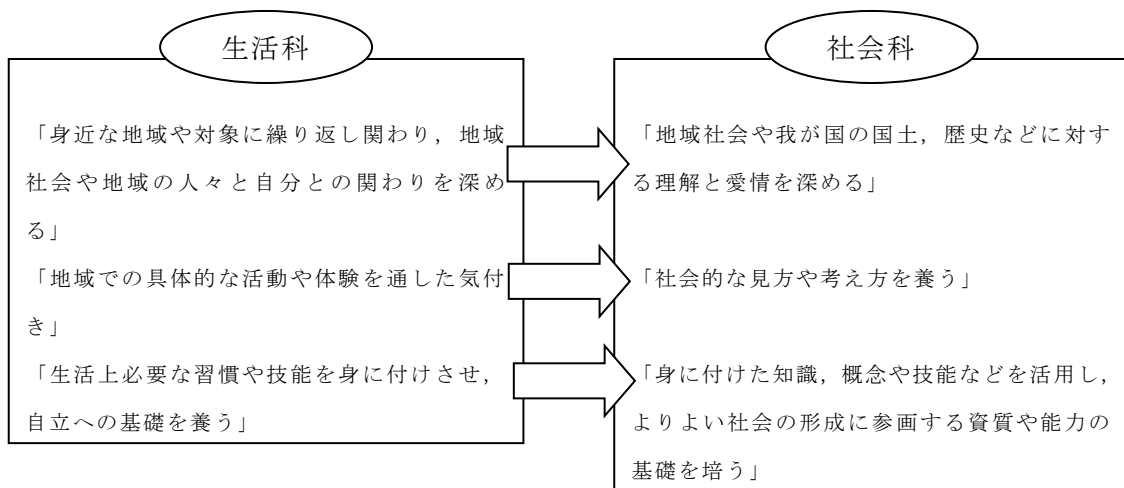


図4 社会科と生活科の関連

<引用・参考文献>

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』，日本文教出版，2008年
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』，東洋館出版社，2008年
- 木村吉彦『小学校新学習指導要領の展開 生活科編』，明治図書出版，2008年
- 北俊夫・片上宗二『小学校新学習指導要領の展開 生活科編』，明治図書出版，2008年
- 片上宗二・木村博一・永田忠道『混迷の時代！“社会科”はどこへ向かえばよいのかー激動の歴史から未来を模索するー』，明治図書，2011年